

豊川小だより

7月号

「ちょっとがんばる」夏休みに

ホームページ
QRコード



令和7年6月30日
北区立豊川小学校
校長 中村 順子

校長 中村 順子

「かなちゃん」という女の子を担当したときの思い出です。

かなちゃんを担当したのは、彼女が5、6年生だった2年間でした。かなちゃんは、おしゃれが大好きで元気いっぱい、笑顔がかわいい子でした。

そんなかなちゃんには、苦手なことがありました。それは水泳でした。5年生で水泳の学習が始まると、かなちゃんはプールに入ろうとしません。理由は「おなかが痛い」「足が痛い」…。お母さんも本人が言うのなら仕方ないと思い、プールカードには毎回「見学」と書いていました。

＊

6年生になり、かなちゃんの目の前には困ったことが立ちはだかりました。それは「水泳記録会」です。当時北区には、近くの6校程度の学校が集まって、6年生全員が泳ぐ「連合水泳記録会」という大きな行事が9月に行われました。その頃のスタートは「逆飛び込み」、水泳選手のような飛び込みで行っていました。

かなちゃんは、二つの心で揺れていました。一つは「6年生としての大きな行事だから、水泳記録会には出なくっちゃ」、もう一つは「見学するかその日休んでしまえばクリアできる」という気持ちでした。初めの頃は、見学か休むかで水泳記録会をやり過ごそう、そんな気持ちが断然勝っていました。

7月の水泳の授業で周りの友達が一生懸命に練習を重ねる姿を見ていくうち、何と、かなちゃんの気持ちに変化が出てきました。夏休みの水泳練習会が始まったある日、受付に水泳バッグを持ったかなちゃんが来たのです。私は内心びっくりしたのですが、何事もなかったようにかなちゃんを迎え、一緒にプールに入りました。今までほとんど泳いでこなかったかなちゃんですので、バタ足はおろか、顔をつけることもやっとでした。そのため、明日はもう来ないのではないかと思っていたのですが、翌日もかなちゃんは来ました。次第にかなちゃんは顔を付けられるようになり、バタ足も覚え、夏休みが終わる頃には、息継ぎなしのクロールができるまでになりました。日に日に自信を付けていくかなちゃんには驚くばかりでした。

＊

9月になり、水泳記録会が目前に迫ってきました。かなちゃんは25m自由形にエントリーしました。その当日。プログラムが進み、あと3人でかなちゃんの番になったときです。かなちゃんは近くにいた私に「先生、やっぱりやめる。」とつぶやいたのです。そのときは私もさすがに驚きました。順番はすぐ目の前に迫っています。かなちゃんと私は一言ずつやりとりをしました。するとかなちゃんは「…うん。」と小さくうなずき、スタート台に上りました。かなちゃんはスタートの合図にほんの少し遅れたものの、プールに飛び込み、ぎこちないながらも泳ぎ始めました。「かーなーちゃん！かーなーちゃん！」という大声援を浴びながら、かなちゃんはそのレースの最下位ではありましたが見事に泳ぎ切りました。ゴールについたかなちゃんには、大きな拍手が送られました。

＊

私とかなちゃんがスタート台の前で話したこと、それは「かなちゃんの背中を押せるのは誰？」という私の質問にかなちゃんが「自分だ！」と答えたこと、たったそれだけでした。かなちゃんは、自分で自分の心のスイッチを入れることによって、やり切ることができたのでした。また、夏休み中に水泳の学習に来たことも、自分でスイッチを入れたことの一つでした。卒業する数日前、かなちゃんは「プールのこと、あきらめないでよかった！自分って意外とやればできるんだって思ったんだ！」と、半年前の自分を思い返していました。かなちゃんにとって、水泳は大きなターニングポイントになったのでしょうか。

＊

苦手なことがあっても、たくさんがんばらなくても大丈夫。「ちょっとがんばること」の積み重ねがあれば、いつかやりとげることができる。そのことを子供たちに伝えながら応援することが、私たち大人の役目だと思っています。長い夏休みに子供たちが多くの「積み重ね」ができるよう、子供たちを取り巻く全ての大人の方々に応援をお願いできればと思っています。